



田島しゃんぎり保存会
かつお
会長 小椋 勝郎 さん

会長あいさつ

田島しゃんぎり保存会は、わずか数人から始まった小さな団体ですが、今ではたくさんの皆さんに加わっていただき、本当にうれしく思っています。祇園祭や福島県芸術祭、歌舞伎舞台の幕間で演奏する機会も得て、地域の皆様にも広くこの活動を知っていただけるようになりました。月に2~4回の練習を行っていますが、最近では親子連れの参加も増え、子どもから年長者までが集うアットホームな場所となっています。私たちの最大の願いは、この町を愛してくれる子どもたちを育てることです。田島に暮らす私たちにとって、祇園祭、そしてしゃんぎりの音色はとても特別なものです。しゃんぎり演奏を通して町の良さを感じてもらい、世代を超えた交流を深めることで、地域全体のつながりが生まれると思っています。これからも私たちのふるさと、そして子どもたちの未来のために活動していきたいと思ひます。



田島しゃんぎり 保存会



伝わる音色が
祭りを彩る

保存会の沿革

しゃんぎりの音色は、笛、太鼓、三味線から奏でられ、田島地域の1月から12月の季節を音にして表したものと伝えられています。各部分には楽譜では表現しきれない独特の装飾音があり、その技法は耳と目で捉えられ、脈々と受け継がれてきました。

しゃんぎりの起源については、現存する書物には詳細な記述が不足しており、一般的には歌舞伎文化が生まれた江戸時代初期以降に始まったと考えられています。しゃんぎりの演奏が各屋台歌舞伎の芸場から芸場への移動の時にに行われていることから、その歴史の一端が窺えます。そしてその伝統は、本大屋台、中大屋台、上大屋台、西屋台の4つの屋台で長きにわたり継承されてきました。これらの屋台では、5人1組の演奏者たちが一丸となって、町を練り歩きながらしゃんぎりを奏で、祭りの神聖な雰囲気を出してきました。



会員インタビュー

小学2年生からしゃんぎりを始め、太鼓、笛、三味線の全ての楽器を奏でることのできる星さんにお話をうかがいました。



田島しゃんぎり保存会
まお
星 真緒 さん

Q. はじめたきっかけは？

町のイベントで、演奏している保存会の皆さんを見たとき、祇園祭の音色だと思ったのと同時に、心躍るような感覚になり、その姿に憧れ挑戦してみました。

Q. 挑戦してみようでした？

初めは、慣れない楽器にとっても苦戦しました。入会して数ヶ月、東京の六本木で大勢のお客さんの前で演奏する機会がありました。緊張と自信の無さからか、あまりうまくいなくて、もっとうまくやりたいと思ひました。それから、たくさん練習を重ね、今では楽しみながら演奏ができるようになりました。

Q. 魅力は？

やっぱり、しゃんぎりの音色を聴くと気持ちがワクワクするところだと思います。それは演奏していても同じで、小さいころから慣れ親しんだ祇園祭に欠かせない伝統芸能を継承していることに、誇りと自信をもって演奏します。

Q. 今後の目標は？

私はしゃんぎりが好きです。今後、進学や就職で忙しくなっても、お祭りの時には屋台の上で演奏をしたいです。しゃんぎりは自分の一部であり、これからずっと大事にしていきたいと思ひます。しゃんぎりは流れていて当たり前なだけに目立たない存在かもしれませんが、今年も祭りを盛り上げるために一生懸命演奏したいです。



昭和初期には、これらの屋台の有志が集い、「田島祇園囃子保存会」が設立されました。保存会は伝統の維持と発展に努めてきましたが、平成初期には演奏者の高齢化や後継者不足により、一時的に解散の危機に直面しました。しかし、祇園祭の祭囃子の消滅の危機を知った演奏者や祭りの関係者数人が立ち上がり、現在の「田島しゃんぎり保存会」を結成し、伝承を続けています。現在、この保存会には子どもから年長者まで37人が所属し、会津田島祇園祭や福島県芸術祭などで演奏を披露しています。

地域ごとに伝承されてきた伝統芸能は、高齢化や後継者不足により存続が難しい状況で、全国的な課題となっています。田島しゃんぎり保存会では、子どもたちに楽しく伝統文化に触れ学んでもらうことで、祇園祭の伝統的な音色を未来に継承する努力が続けられています。

